



共生社会システム学会ニュースレター The Association for Kyosei Studies News letter

2017年8月9日発行 第17号

目 次

1. 2017年度大会（名古屋学院大学）の開催について	1
2. 第2回「運営委員会」の開催と議事内容の報告	5
3. 『共生社会システム研究』編集委員会からの報告	6
4. 運営委員会事務局だより	6

1. 2017年度大会（名古屋学院大学）の開催について

2017年度大会（名古屋学院大学）を以下の要領で開催いたします。

- ・日程：9月2日（土）・3日（日）
- ・会場：名古屋学院大学名古屋キャンパス白鳥学舎（希館2階）
- ・大会テーマ：『多文化共生時代の可能性と未来』
- ・大会実行委員長：木村 光伸

○ 第1日目：9月2日（土） 希館 201号室

- 12：30 受付開始
- 13：30 開会挨拶・開催校挨拶
- 13：35～14：40 基調講演 田中二郎氏（京都大学名誉教授）
「アフリカの狩猟採集民ブッシュマンの生活と社会」
- 14：40～14：50 休憩
- 14：50～17：00 大会シンポジウム『多文化共生時代の可能性と未来』
座長（木村光伸・古沢広祐）
- 14：50～15：00 シンポジウムの趣旨と討論の方向性を巡って（座長）
- 15：00～16：30 シンポジウム報告
 - 第1報告 森本幸裕氏（京都学園大学特任教授・京都大学名誉教授）
「賢い適応としての雨庭グリーンインフラ—自然共生社会を目指すなかで」
 - 第2報告 河路由佳氏（江副学園言語教育研究所・主席研究員）
「多言語多文化共生社会の可能性—足もとの「もう一つの言語」から」
 - 第3報告 田中敏裕氏（元国連開発ミャンマー・パキスタン・フィリピン事務所長）
「SDGsと共生社会のレジリエンス構築」
- 16：30～17：00 総合討論
- 17：30～19：30 懇親会（曙館1階食堂）

＜＜シンポジウム「多文化共生時代の可能性と未来」の趣旨＞＞

座長 木村光伸・古沢広祐

昨年度、本学会は学会創立10年を記念する書籍『共生社会Ⅰ－共生社会とは何か－』『共生社会Ⅱ－共生社会をつくる－』を上梓し、広範な研究分野を網羅する共生社会論を展開した。さらに昨年度の研究大会では、それを基礎としたシンポジウム「共生社会をつくる 時代の閉塞を越えて」を開催したが、そこでは共生社会理念の深化とそれを阻む時代の閉塞観を実践的に乗り越える道が模索された。とはいえ、共生社会という言葉が持つ理念やそれを実現するために実践される方策の内実は、それを語る人の学問観や社会的諸活動に埋もれて見えにくく、「共生」という言葉の共有それ自体とは別に、世界を異なった感覚と経験で理解しようとする和解が困難な対立（非調和）の構造として捉えてしまっていることが少なくない。そのような事態を生み出す大きな原因の一つは、私たちが無自覚に、「世界はひとつ」と捉え、科学的事実としても曖昧な理解のままで「人類は Homo sapiens という単一（あるいは同一）の存在である」と考えるところから、多くの（すべてのとはいわないが）共生論が出発しているという点にあるのだろう。

現代社会は、多くの矛盾を孕みつつ、しかし概ねは、「共生可能なひとつの地球」の実現を模索しているといっていよう。少なくとも国際連合は、共生を意味する内実であるとともに、その前提でもある概念として「持続可能性」を前面に出して、SDGs（Sustainable Development Goals、持続可能な開発目標）を掲げて行動しつつある。それはMDGs（Millennium Development Goals、ミレニアム開発目標）に続く2016年から2030年までの国際目標であり、その多様な取り組みと達成への道筋そのものが文化の多様性を前提とし、また文化の多様性を担保するという性格のものである。

ところが他方では、特定の宗教的主張や政治志向、偏った文化価値の押しつけによって、文化の多様性を否定し、国民合意による主権の表明や民族固有の文化理解を否定するような行動が、世界のいたるところで暴発し、あるいは蔓延し、言葉の真なる意味における「共生」はグローバルにも、ローカルにも保障されるところとはなっていないのが現状であろう。

誰もが否定しない「共生」という生き方が現実の社会生活では実現困難であるということの最大の理由には、すべての隣人が同じ生物的背景を有し、等しく自らの生き方を自らの意思で選び取るという人間の尊厳性を有しているという人類生存原理の前提を、十分に理解し得ていない現代社会の未熟さがあるのではないか。

今回のシンポジウムは、その前に準備されている田中二郎氏による基調講演「アフリカの狩猟採集民ブッシュマンの生活と社会」で人間社会のありようと人間存在の普遍的価値を考えるとところから出発したい。わたしたちは「人間を差別してはならない」という純粹だが単純な思考に支配されて、すべての人類社会を「同等的価値を持つもの」と理解しようとする。しかし、現実の少数民族、先住民社会を知ることなしに、そのような「とりあえず」的な理解で「平等観」を持つことは不十分であるばかりか、正しくないことでさえある場合を想定しておかねばならない。

シンポジウムでは、多文化共生時代が持つであろう豊かな共生社会のイメージを、①多文化共生の前提となる自然観や自然との対話、自然の多様な利活用などの視点から、また、②多言語文化主義に支えられる多様な人間表現のあり方やそこから生まれる多文化社会の時代のあり方から考えたい。さらには、③そのような多文化時代をグローバルに支える枠組みとして、SDGsの持つ役割の重要性は、とくに強調しておく必要がある。多文化はローカルな生活の積み重ねとそれを支える試みによって守られ、実現する。しかし、それは文化の孤立主義を意味するものではなく、地域社会で固有に創造され、保全されていくかけがえのない文化を、地球規模で守り、支えていく取り組みと仕組みがなくてはならない。しかもそれは、誰かが準備してくれるものではなく、それぞれの地域で自らの文化を考える中で醸成されていくものであらねばなるまい。多文化時代の新たな地平は、自然と向き合い、自然をすら創造する人間力と、自己や他者の言葉やコミュニケーションの独立性と人間としての連続性を共有する知性、さらにはそれらを地球市民として

共通の基盤において受け止めるグローバルな社会システムによって構築されるのである。

本シンポジウムがそれらを豊かに語りだす第一歩となるように、演者、フロアの皆さまを繋ぐ努力をすることが司会者に課せられた使命であるとする。

○ 第2日目：9月3日（日） 希館 202～204号室

9：30～11：25 個別報告

セッション (会場)	座長	時間	報告者	所属	報告タイトル
A (希館 202号室)	片山善博 (日本福祉大学)	9:30～9:55	福田 鈴子・ 砂子 岳彦	常葉大学	人間構造の仕組みから解く共生社会の在り方 —自己と他者の関わりに焦点をあてて—
		10:00～10:25	太田 和彦	総合地球環境学研究所	「倫理的消費」概念の食農倫理と 環境倫理からの整理
	福田恵 (広島大学)	10:30～10:55	三木 敦朗	信州大学学術研究院 農学系	「循環型社会」は森林を収奪するか： 森林法制の改正と林野における所有権
		11:00～11:25	盧 珺	金沢大学	山西省における「四社五村」水利自治組織の近代化 —技術・経営・宗教に注目した変容過程分析—
B (希館 203号室)	岡野一郎 (東京農工大学)	9:30～9:55	森 祐希子	東京農工大学 言語文化科学部門	英国初期近代における庭園と権力—エリザベス一世時 代の歴史書とシェークスピアから考える—
		10:00～10:25	八谷 史江	東京農工大学	ネパールにおける少数民族教育の課題 —ネワール族学校を事例として—
	北野収 (獨協大学)	10:30～10:55	陳 創斌・ 轟 海松	東京農工大学大学院	中国における地溝油の改善策の検討について —人材流失・法整備・BDF燃料・先進国の経験から—
		11:00～11:25	楊 非凡・ 轟 海松	東京農工大学大学院	Comparative study regarding population aging in China and Japan (中国と日本の人口老齢化に関する比較研 究)
C (希館 204号室)	中尾誠二 (福知山公立大 学)	9:30～9:55	山田 浩子	愛知県立大学	学校給食への地場食材供給の展開過程における阻害 要因とその解消方法—東京都日野市(大都市近郊地 域)を対象とした実証分析—
		10:00～10:25	堀口 健治・ 弦間 正彦・ 軍司 聖詞	早稲田大学	農業者の長寿傾向がもたらす医療費削減と 健康寿命延伸化の研究
	立川雅司 (名古屋大学)	10:30～10:55	中出 了真・ 劉 健・ 関 礼郎	東京農工大学	食生活改善による生活習慣病予防の可能性 —悪性新生物を事例に—
		11:00～11:25	小林 邦彦・ 高橋 雄一	総合地球環境学研究所・ 國學院大學大学院	環境条約の実施における専門家の役割 —ワシントン条約を事例に—

12:15~13:00 総会 (希館204号室)

13:00~15:00 企画ワークショップ

A会場 (希館202号室)

増田敬祐 (茨城大学) 『共生社会と「自己」の探求—求められる人間像—』

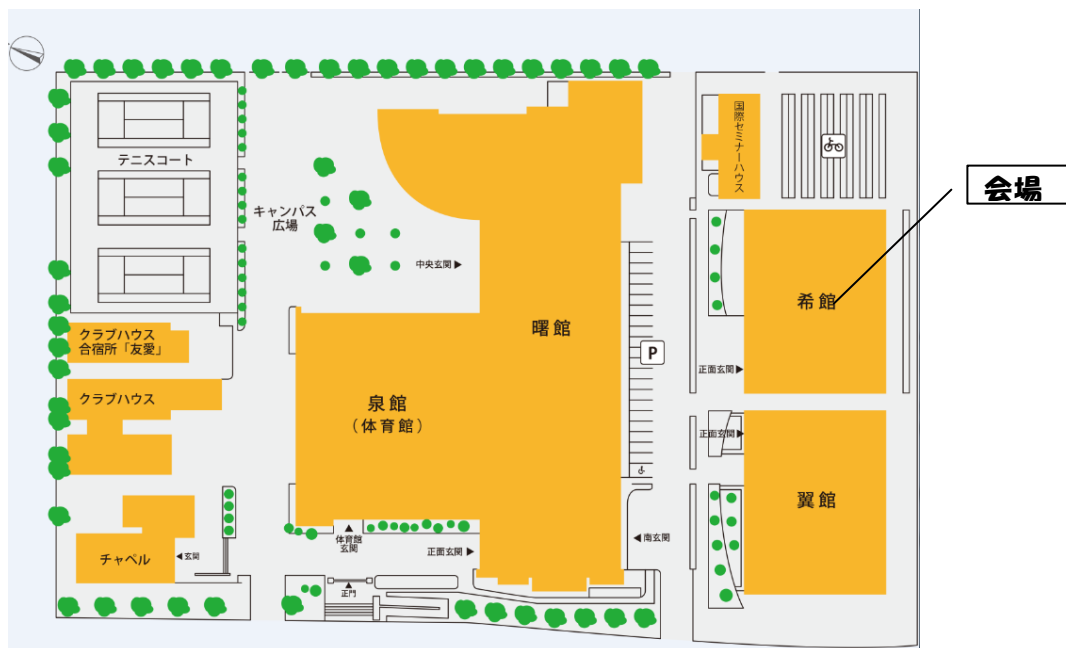
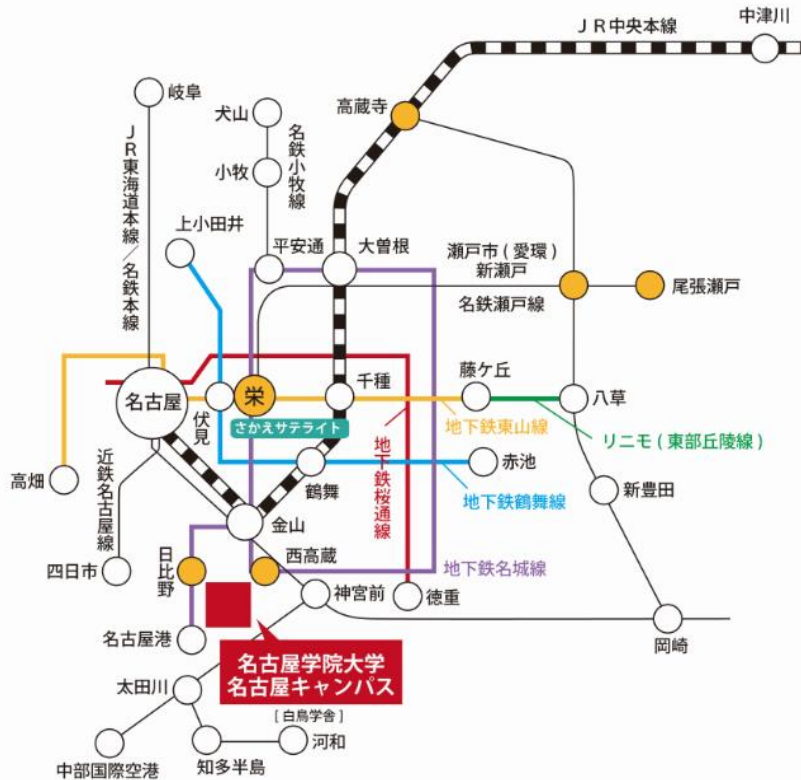
B会場 (希館203号室)

岡野一郎 (東京農工大学) ・桑原考史 (日本獣医生命科学大学)

『共生社会システム研究の10年とこれから』 (仮)

<<会場までのアクセス>>

名古屋学院大学名古屋キャンパス 白鳥学舎 〒456-8612 名古屋市熱田区熱田西町1番25号



- 参加費： 正会員 2,000円、学生会員 1,000円、非会員 2,500円
- 懇親会費： 一般（正会員ほか） 4,000円、学生 2,000円

2. 第2回「運営委員会」の開催と議事内容の報告

- ・日時：2017年7月2日（日）14：00～17：10
- ・場所：東京農工大学府中キャンパス 2号館3階320
- ・出席者：尾関、木村、古沢、岡野、榎本、桑原、稲村、楨平、千年
- ・議題：
 - (1) 前回議事メモの確認
 - (2) 名古屋学院大学大会（本年9月2・3日）について
 - (3) 名古屋学院大学大会 個別報告及び企画ワークショップの応募状況について
 - (4) 次回大会（2018年）開催候補校の検討
日本獣医生命科学大学を来年開催大会校とすることを決定した。開催にあたっては、必要に応じ、農工大スタッフが支援・協力することが確認された。
 - (5) 「共生社会システム研究」編集委員会からの報告
 - (6) 学会顧問の資格条件
顧問委嘱に関して、会則の変更が検討され、以下の案が承認された。
第4章 役員等 第12条（会長および副会長） 四
「会長は必要に応じ、会員の中から顧問を選出し委嘱できる。委嘱にあたっては、運営委員会の承認を得る。」
引き続き、学会顧問の資格条件の申し合わせ（内規）が検討され、以下の案が承認された。「学会員であり、学術的・社会的活動において顕著な実績を有し、本学会の発展に対して助言を行うことができると運営委員会が認める者。」
以上を運営委員会案として、9月3日開催予定の理事会で承認を諮り、前者の会則変更については、同日開催予定の総会において承認を諮ることとする。
 - (7) 新会長選出について
尾関会長の任期は1年で、次回総会（9月3日開催）後に会長が交代すること、新会長は現副会長3名のうちから選出することが原則という、これまでの決定事項を踏まえ、協議した結果、木村副会長が新会長候補として選出された。ただし、木村副会長の会長就任の受諾条件として、以下の2点が確認された。
 - ・任期は尾関会長の留任期間である1年とする（再任可能）。
 - ・顧問に関する会則ならびに申し合わせの承認という条件付きであるが、尾関会長および亀山会員は顧問として、木村新会長体制を支援する。
 - (8) 学会声明について
文科省の人文社会科学系学部の見直しや防衛省の軍事研究予算に対しての学会声明について協議した結果、やや時期が逸したという意見も出たが、本事項に対する学会の姿勢を表明することは意義があるということになり、尾関会長と亀山理事が協力し、原案を作成することとなった。その原案を副会長等が確認した後、運営委員会（メール審議を予定）により承認されたものを運営委員会案とし、次回（9月5日開催）理事会で承認を諮ることとなった。その承認をもって、同日の総会で動議することとする。なお、本声明を、学会、または学会有志の声明にするかは、理事会、総会での審議結果による。

(9) その他

学会基盤強化のための検討事項の整理：長期間（5年以上）滞納し、連絡先が不明となっている学生会員の取り扱いについて審議した結果、3年以上の学会費滞納者を除名できるという会則（第7章（入会金及び会費））を、除名ではなく除籍に修正する案が承認された。それに伴い、第8条（資格の喪失）についても、除名の除籍への修正が承認された。本運営委員会案を9月4日開催予定の理事会で承認を諮り、その承認をもって、同日開催予定の総会で承認を諮ることとする。

以上の会則変更後、長期間（5年以上）滞納し、連絡先が不明となっている学生会員の除名を随時、進めていく。除名に際しては、元指導教員にその旨、確認してから行うなど、慎重を期して実施していくことも今後の検討事項とする。

3. 『共生社会システム研究』編集委員会からの報告

(1) 『共生社会システム研究』第11巻について

編集状況は順調であり、名古屋学院大会時に参加会員に配布する予定である。

(2) 『共生社会システム研究』第12巻について

『共生社会システム研究』第12巻への投稿原稿を募集しますので、ふるってご投稿下さい。締切日は10月2日（月）です。今年から、締切日が1ヶ月早くなりますのでご注意ください。締切日を超えた投稿については、原則、次巻（第13巻）掲載の原稿として取り扱いますので、あらかじめご承知おき下さい。

また、第12巻より、当学会ウェブサイトに掲載された原稿及び投稿票の書式見本ファイルをダウンロードして使用していただきます。また、紙媒体と同時に電子データをご送付いただきます。このことも含め、投稿規程、執筆要領をよく読んで原稿を作成して下さい。

原稿の送り先：

〒184-8588 東京都小金井市中町2-24-16 東京農工大学工学部電気電子工学科

『共生社会システム研究』編集委員長 岡野一郎 E-mail: i-okano@cc.tuat.ac.jp

4. 運営委員会事務局だより

本文中にも記しましたとおり、2017年度大会が9月2日（土）・3日（日）に名古屋学院大学にて開催されます。木村実行委員長のもと、人間社会のありようと人間存在の普遍的価値を考えたいと、多様な観点から共生社会のあり方を探求するという、非常に野心的な企画が立案されています。会員の皆様にはおかれましては、2017年度大会に奮ってご参加頂ければ幸いです。

皆様からのニューズレター原稿を募集しております。投稿は榎本(hirolaw@cc.tuat.ac.jp)までお送りください。ただし一つの原稿は最大でもページの半分に収まる程度の分量でお願いいたします。

会費納入のお願い

2017年度会費の納入をお願いいたします。会費は、一般会員 6,000 円、学生会員 3,000 円、賛助会員 20,000 円となっております。よろしくお願ひ申し上げます。2016 年度以前の会費を未納の方は、未納分も含めて納入をお願いいたします。

共生社会システム学会ニュースレター 第17号 2017年8月9日発行

編集・発行 共生社会システム学会運営委員会事務局

連絡先 〒183-8509 東京都府中市幸町3-5-8

東京農工大学農学研究院 千年篤研究室 気付

TEL: 042-367-5687 E-Mail: chitose@cc.tuat.ac.jp

郵便振替 00130-6-372850 (加入者名) 共生社会システム学会